

倭人の被髪と徒跣の同時代的検討

門 田 誠 一

序言

『三国志』魏書東夷伝倭人条（以下、魏志倭人伝と略称）には倭の諸国に対するいわゆる里程記事のほかに倭人に関する風俗が記されている。これらについての研究は邪馬台国の所在地の議論に比べれば進展している状況とは言いがたく、その研究方法が課題となっている。魏志倭人伝の風俗記事はかりに見聞に基づく場合であったとしても、『三国志』の編纂過程において、編纂者の意図に関わらず、同時代的な価値観や思想的背景にもとづいて編集されることに意をはらうべきである。すなわち陳寿が『三国志』を編纂した晋代に通有の教養や思想および価値の基盤に立脚したうえで、編纂意図を加えて編まれたのが『三国志』であって、それは現代的な実録とは明らかに異なる編纂物と考えなければなるまい。このような『三国志』編纂における陳寿の姿勢に関しては、政治的立場や思想的系譜および個人的な親縁関係や親族の関わった事跡などとの関連から説かれてきた^{〔1〕}。しかしながら、魏志倭人伝にみえる民俗や風習に関わる具体的な事物や事象に関しては、これ以外に『三国志』編纂時点での個々の対照に関する価値観や認識がその背景にあり、それは魏志倭人伝の記述を同時代の物質資料である出土遺物や遺構およびそれらに関連する史書や文献の記載との対照検討することによって明らかにできる。本論ではこのような視点と方法に立って、魏志倭人伝での風俗記事のなかでも関連する同時代の史・資料の比較的多い徒跣と被髪を取り上げ、

同時代的な位置づけを行いたい。

一 魏志倭人伝の被髪と徒跣に関する従前の解釈

魏志倭人伝には倭の男女の髪型について、「男子皆露紒以木縣招頭」とあり、「婦人被髪屈紒」と記されている。そのうち、男子の「露紒」については「紒」は結髪の意であるとみて、『隋書』倭国伝に「頭亦無冠、但垂髪於兩耳上」とあるのを露紒の様子を示すとして、これはいわゆる『日本書紀』『古事記』などの古代史料や人物埴輪にみられる「みずら」を指すとする説がある。⁽²⁾「露紒」については漢籍を参照して、冠や頭巾をつけない頭をいうとし、「被髪」も同様の意味とする見方がある。⁽³⁾同じく王勇氏は古代から清代までの文献の用例と説明から断髪・被髪などの語義を整理し、断髪は祝髪・被髪などの語に置き換えられることがあり、たんに髪を切るという意味ではなく、魏志倭人伝で倭の男子の露紒と越人の断髪とが同一視されるのは、髪を両耳の上に垂らすなどして鬢を露出するということを指しており、ともに冠を被らず髪を露出する点で一致しているとする。⁽⁴⁾婦人の「被髪屈紒」については菅政友が「被リタル髪ノ末ヲ項ノ辺ニ屈メ束ネテ散ラヌ様ニモノシタル」と述べており、⁽⁵⁾これをもとにして女子人物埴輪の頭部に表現されたつぶし島田風の髪型の系統として理解する見方がある。⁽⁶⁾また、「紒」字の『文選』その他の漢籍の意味と『北史』倭国伝では「屈紒」に相当する語として「婦人は髪を後ろに束ねる」とする記述を参照する立場もある。⁽⁷⁾

しばしば参照される訳のなかで他にも「露紒」を「みずら」とし、「被髪屈紒」を「束髪のだぐい」とするものがあるが、⁽⁸⁾これらはいずれも誤謬または誤解があり、先学の指摘のあるように、束髪すなわち髪を束ね、冠をつけることの対照として「被髪」の語が用いられるのであり、この点については本論で述べていきたい。

いっぽう魏志倭人伝の「倭地温暖冬夏食生菜皆徒跣」の部分については、倭の地が温暖であるため、「皆徒跣」

すなわち「はだし」であるとする解釈が定説となっており、代表的な訳書ではそのように記されている。徒跣に関する漢籍を参照した近年の解釈として、佐伯有清氏は中国古典にみえる徒跣について、葬儀に際する儀礼な用例として『礼記』喪大記の「凡そ主人の出ずるや、徒跣して衽(おくみ)を扱(さ)しはさみ、心を拊(う)ちて、西階より降る」をあげている。また、『戦国策』魏策に「秦王曰く、布衣の怒(せめ)には、亦(ただ)冠を免(ぬ)ぎ徒跣し、頭を以て地に搶(つ)かしむるのみ」や『漢書』匡衡伝に「(匡)衡、冠を免(ぬ)ぎ徒跣して罪を待つ」などの用例は罪を責めるにあたつて、責められる者が被り物を脱ぎ、「はだし」になる行為を示すとする。また、これらとは別に『三国志』呉志・薛綜伝に引かれている上疏に述べられた交趾における「徒跣」などの習俗としての事例をあげている。⁽⁹⁾

二 被髪と用例

被髪と断髪の意味については語学からの研究もあり、同義とされることもあるのに対して、実際の用法、用例では、両者が異なることが指摘されている。⁽¹¹⁾ また、「被髪」「断髪」を含む髪を媒介とした文化史や思想全般に関する考察としては二〇世紀前葉の時点での江紹原氏の研究があげられる。⁽¹²⁾ その後、高木智見氏によつて、歴史学・考古学的見地からの包括的な考察が行われた。⁽¹³⁾ 本論での文献および考古学の事例と思想的知見も、多くをこれらによつてゐる。

断髪は中華世界からは東南の海辺の呉越・交趾・倭に共通してみられる表現であるが、いずれも海中に没する習俗に関してみえる語であることが注目される。断髪に比すると、被髪は地域的、環境的に異なる集団にもみられる。その用例の一つが経書のなかでも、とりわけ礼書にみえる被髪語である。しばしば引かれるのは、『礼記』王制の「東方を夷という。被髪・文身して火食しない者がある。…西方を戎という。被髪・皮衣にして、粒食しない者

がある」という記述であり、ここでは東夷とともに西戎の風俗として被髪が記されている。¹⁴これは中華社会の四方に住した異民族たる夷狄に対する記述として著聞するものであり、ここでは東夷とともに西戎の被髪があげられている。西戎そのものは具体的民族を指すのではなく、西辺に住む人々を抽象化した語であるが、少なくともその地域に海はなく、倭や呉越、交趾などのように断髪して海に水没する習俗とは無関係である。それにも関わらず、西戎に被髪の記事がみえるのは、断髪と被髪とは、これらを規定する考え方が異なることを示している。すなわち、『礼記』王制では東夷も西戎も、おしなべて被髪と記されており、それらが区別されていないのは、中華世界の礼制を規範とした立場にたった記述であり、礼に基づいた習俗からみれば、ともに被髪と位置づけられることを述べているのであり、個別具体的な髪形を指し示しているわけではなからう。このような意味での被髪は『論語』憲問篇に「管仲なかりせば、吾は其れ被髪左衽ならん」とみえており、もし管仲のはたらきがなければ、中華社会が左衽被髪になっていたであろうと述べており、これらが異民族の風習であることを前提としている。

礼を規範としてこれに相反する意味での被髪は古典にみえるところである。たとえば『春秋左伝』僖公二十年条には、初め、平王が東遷すると、辛有は伊川に適¹⁵き、被髪して野に祭る者を見て、こういった。百年経たないうちに、これ戎となるであろうと。続いて、礼がまっさきに滅んだ、とあり、被髪が夷狄の習俗であり、礼にかなわないことを述べている。¹⁵『後漢書』西羌伝にも司徒掾班彪上言のなかに、羌胡は被髪左衽して、漢人と雑居しているが習俗は異なり、言語が通じない、とあり、漢人と雑居していても、被髪であって、習俗や言語が異なったことがわかる。¹⁶

これらによって被髪は異民族たることを示す定型的な語であることがわかるが、それ以外の用法もあり、たとえば人間の異常な状態を表す場合に用いられる。その象徴としては屈原をあげるにしくはない。いうまでもなく、屈原は楚王に仕えていたが、秦により楚の首都の郢が陥落した事で楚の将来に絶望し、汨羅江に身を投げた。その直

前の有様として洞庭湖のあたりを被髪して行吟した⁽¹⁷⁾、とある。この話が史実であるか否かよりも、ここでは屈原の異常な状態を表すのに被髪が用いられていることが重要である。

この種の被髪の利用例は多いが、一、二をあげると、『春秋左氏伝』にみえる大厲は大きな幽鬼というほどの意味であるが、晋の景公の夢に現れ、子孫を殺された怒りと恨みを発現するその姿はといえば、「被髪及地」すなわち地につくほどの長髪をふり乱し、手で胸うち、足をふみ、おどろあがつて、門を破壊しながら迫ってきたというところで景公は夢よりさめる⁽¹⁸⁾。同じく『春秋左氏伝』の哀公十七年七月条には殺された渾良夫が衛公の夢に現れ、己の身の潔白を叫ぶという話があるが、この時の渾良夫は「被髪北面」と記されている⁽¹⁹⁾。

髪を振り乱し、狂人を装うことを示す「被髪佯狂」の成語の典故としては箕子の説話が知られる。すなわち、殷の紂王の叔父である箕子は酒色におぼれる紂王を諫めたが、紂王は政治を顧みず、暴政から逃れるために自分が亡命すれば故国の恥を他国にさらすことになると考えた箕子は被髪で、気が狂ったふりをして幽閉されたという⁽²⁰⁾。

また、礼をそなえた人ではなく、異常な状態を示す用例としては『爾雅』に「狒々は人に似ているが、被髪して迅く走り、人を食らう」と記されていることに明らかであり、狒々すなわちヒヒは外見は人に似るが被髪であり、走り方も尋常ではなく、人を食うとして人との動物的物理的な違いを述べるために被髪が用いられているのである。ここまでみてきたように「被髪」の語は礼俗の外にある異民族や人や鬼などのいわば異常な状態を示す場合に用いられた語であることがわかる⁽²¹⁾。

三 中国史書・文献にみる徒跣

『三国志』のみでは事例が寡少なため、『漢書』『史記』における徒跣に関する記載を検じてみると、大きくわけ次のような四種類の用法がある。

一つめは火急または緊急の際に、とるものもとりにあえずという行為を表す場合である。まず、『三国志』にみえる典型的な用例を示す。袁紹に能力を買われた臧洪は兗州の東郡太守に任命され、東武陽に移り住んだ。張超はこのとき、一族と共に雍丘において曹操軍に包囲されていた。人々は臧洪が袁紹から恩義を受けているということと、袁紹と曹操が友好関係にあることから、臧洪が救援には赴かないだろうと思っていた。しかし張超だけは臧洪自身に救援の意思があると信じ、時間の制約があつて間に合わないことのみを心配していた。臧洪は裸足で走り出て、配下の兵士を揃えると共に、兵馬を借りて救援に行きたいと袁紹に願ひ出たが許されなかつたため、結局雍丘は陥落し張超は自害、一族は全滅した。⁽²²⁾この後、これを恨んだ臧洪は袁紹と絶縁を宣言する。ここでは臧洪が恩義のある張超のために加勢することを急ぐあまり、裸足で走り出て出陣の準備をしようとしたという場面で徒跣の語が用いられている。

甘寧の料理人が失敗をして呂蒙の元に逃げ込んだ時に、呂蒙は甘寧が彼を殺すことを心配して、送り返さなかつた。後に甘寧は料理人を殺さないと約束したのに桑の木に縛りつけ、自ら弓を引いて殺した。呂蒙がこれを怒り太鼓をたたいて兵を集めて甘寧を攻めようとした時に、呂蒙の母親が徒跣して諫め、私事で争いは臣下にあるまじきことであるという、孝心が篤い呂蒙は氣持がとけた、とある。⁽²³⁾この場合も、呂蒙の短慮を諫めようとした母の火急な有様を表すのに「徒跣」の語が用いられている。

このような意味の徒跣は『日本書紀』にも朱鳥元年（六八六）のこととして「被髮徒跣、奔赴殉焉、見者皆歔歔（髪を振り乱して裸足で走り、殉死した。それを見た者は皆嘆き）」として用いられており、上述の用例のような漢籍による修文と考えられる。これによつて『日本書紀』編纂段階で被髮・徒跣の意味とこれらを含む漢籍の知識が受容されていたことが知られる。

二つめは謝罪の体現としての動作である。この例も多いが、いくつかをあげておきたい。前漢の高祖が黥布の討

伐を終えた帰途に人びとから蕭何の罪を訴えられた際に、この機をとらえて、蕭何は長安の農地の不足と、それに対する上林苑の広大な土地の遊休に対して、民衆への開放を願ひ出たのに対し、高祖は蕭何が商人どもから賄賂をもらったかと言って激怒し、蕭何の身柄を獄吏の手に渡してしまう。進言する者があり、使者に節を持たせ赦免して蕭何を釈放させると、蕭何は年老いて、もともと恭謹であつたから、参内し、徒跣して謝罪した、とみえる⁽²⁴⁾。この後、高祖は民衆のために願ひ出た蕭何を宰相として評価するとともに、自らを桀や紂のような暴君にたとえた。免冠は冠や被り物を脱ぐことであるが、これらとともに徒跣が行われた例としては、前漢・文帝の寵臣であつた鄧通が丞相の申屠嘉に対して、傲慢無礼な行いがあつた際に、申屠嘉は勃然として大いに怒り、鄧通を捕らえて拘束しようとしたところ、彼は免冠すなわち、被り物を取り、徒跣すなわち履物を脱いで、裸足となつて頓首して謝した、とある⁽²⁵⁾。

同様の行為は匡衡の子で越騎校尉の昌が酔つて人を殺し、詔によつて獄に繋がれた際、昌の弟らが、これを奪いかえそうと謀つたが、事が発覚したため、匡衡は徒跣して罪を待つたが、天子は謁者を遣わし、詔をもつて冠と履を着けさせた、とある⁽²⁶⁾。

また、女性の場合は、たとえば前漢・武帝の姑である館陶公主（竇太主）が董君（堰）を弁護し、その行いを帝に謝罪するに際して「去簪珥（かんざしと耳飾り）を去りて、徒跣し、頓首して謝す」とあり、詔して聴されたが、簪や耳飾りなどを外したうえで徒跣して謝意を表することもあつたらしい⁽²⁷⁾。

そして、三つめが夷狄の習俗としての徒跣である。その例として前漢武帝代の交趾に監督府と刺史を置いた時にあつて、風俗に関する以下のような報告がある。すなわち、その地は山川がはるかに連なり、習俗もそれぞれに異なっているなどであり、言葉も様々で何度も通訳を介してやっと通じた状態であつて、椎詰（髪⁽²⁸⁾の毛を頭の上に束ね）・徒跣し、貫頭の衣服を左前に着ている。ここにみえる「徒跣」は用法としても倭人伝と同じ類型であるこ

とがわかる。

四つめとしては喪例に関して徒跣することが経書にみえる。すなわち、『礼記』喪大記には、喪主が客を出迎えるには「徒跣して衣服の衽の端を帯にはさみ、手で胸を打ちながら、西の階段を降る」とある。²⁹⁾ おなじく『礼記』問喪では「親が死ぬと、まずは冠をぬいで、笄と元結を残すだけとし、徒跣して、衣服の衽の端を帯にはさみ、両手を交えて、哭す」とみえている。³⁰⁾ これらによつて喪礼に際して、徒跣でこれを行う場合があることが知られる。

時代の下る例であるが、喪礼と関連した記述としては墓を守る際の追孝としての徒跣があり、『新唐書』烈女伝には孝女の例として次のような話がある。劉寂の妻の夏侯氏は、滑州胙城の人で、字を碎金といった。父の夏侯長雲は塩城の丞となったが、失明してしまった。ときに劉家ですでにふたりの娘が生まれていたが、彼女は劉家と絶縁を求めて、実家に帰つて父を看病した。また継母につかえて孝と称された。五年して父が亡くなると、悲しみのため衰弱し、服喪に耐えないほどであつたが、被髪・徒跣して、みずから土を背負つて墓塚を作り、その傍に庵を結んで、寒くても綿を着ず、一日一食を三年つづけたという。³¹⁾

以上のように文献・史料に現れる徒跣の用法と意味については、緊急の際の非常を示す行動、謝罪を体現する場合の動作、夷狄の習俗、喪礼に際する行為という四つがあることが知られた。そして、夷狄の場合以外は儒教的礼俗を強調したり、さらにはその度を超えて逸脱した状況に起因する動作や行為であることを確認しておきたい。

四 考古資料からみた被髪

脚部が明瞭に示されない場合も多いため、徒跣に関連する考古資料は明らかでないのに対し、被髪を具体的に示す考古資料としては墳墓から出土する副葬品としての俑や金属製の人物表現がある。学術的な報告が出されているなかから、とくに被髪や髪を短くした断髪などの特徴が顕著に示されている例をあげてみたい。

江蘇・丹徒北山頂八四DBM号墓から出土した青銅製懸鼓杯と青銅製鳩杖には頭髪を短く切った人物像が鑄出されていた。青銅製懸鼓杯とされる遺物は上部に把手状の環となっており、下部は平面四角形の座金具状を呈している。環と座金具の間には四角形の対角線方向にそって合わせて四箇所に跪座の人物像が鑄出されている。報告書では人物像の頭頂は髡と表現されており、頭頂に髪がなく、額の前に短い髪が表現されており、身体と腕には雲文が施されている。青銅製鳩杖は先端部の鳩形装飾のある部分と石突部分が出土しており、石突部分の下部には両手を膝の上に置いた姿勢の跪座人物像が鑄出されており、その頭部は耳の上部までの短髪で、後頭部には二箇所で髪をまとめ、その内部に花弁状の文様が表現されている(図1-1)。この墓の年代は出土した青銅器から春秋時代晚期と推定されている³²⁾。

青銅製鳩杖の断髪人物としては他にも春秋時代後期に属すとみられている浙江・紹興漓渚鎮出土例があり、鳩形の飾りがついた杖首と鍬すなわち石突が出土している。そのうち鍬の下部には跪座人物が表現されている(図1-2)。この人物は両手を膝の上に置き、全身に雲文と幾何学文を施し、頭部は額と耳の上に髪を切り揃えた様子が表されており、断髪の表現とみられている³³⁾。

これらの被髪あるいは断髪の対極にある束髪については考古資料によってあとづけることができる。束髪とはたんに物理的に束ねた髪をいうのではないことは、『礼記』の記述などにみることができる。内則篇では家庭内における礼儀作法や生活規範について述べるが、たとえば成人男子が父母に仕える際の礼儀作法として髪については次のようにみえている。すなわち、一番鶏が鳴いたら起きて、手や顔を洗い、口をすすいで、髪をくしけずり、筭などで調べ、前髪を拭い、冠をつけて紐を結んで髪を総べる、とある³⁴⁾。

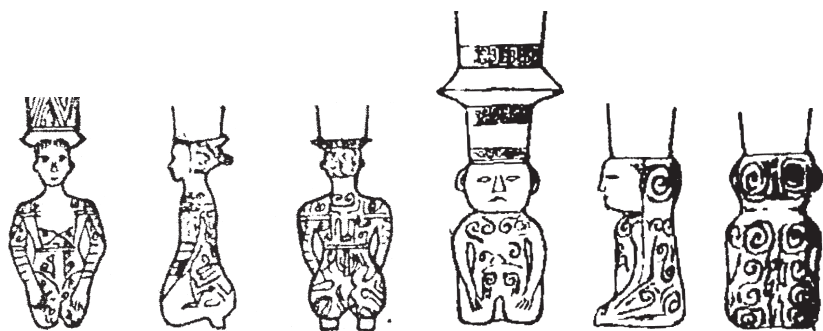
このように束髪はたんに髪を束ねるだけでなく、冠を被るための前提となる行為であって、これについても『礼記』曲礼上篇では「男子は二十歳にして冠をつけ、字を用いる」「女子は婚約すると頭に笄をさし、字を用いる」

とあり、男子は二十歳になると髪をゆって冠を被り、女子は十五歳になって婚約が成立すると髪をゆって笄をさすことになっていった。また、成人が冠を被ったこととその意味については、『礼記』冠義に人たる所以は礼儀であると述べたなかで、「冠をつけてはじめ礼儀としての服が備わる」とし、また「冠をつけるのが礼儀のはじめである」から、古の聖王は冠をつけることを重視したとみえており、礼俗において冠をつけることが基本であることが説かれて³⁶⁾いる。

成人にとって冠が必須のものであったことについては『史記』儒林列伝にみえる轅固生との問答における黄生の言に君臣関係の比喻として「冠は敵すといえども必ず首に加し、履は新しきといえども必ず足に関す」とあり、すなわち、冠はたとえ破れていても必ず頭に被るものであり、履はたとえ新しくとも必ず足に履くものであると述べられている。³⁶⁾同様の内容は『韓非子』に「夫れ冠は賤しといえども頭必ずこれを戴く。履は貴しといえども足必ずこれを履く」とあり、やはり冠と履をつけることが必要であることを述べている。³⁷⁾『礼記』にはこの他にも地位や身分によって異なる髪や衣服についての記述があるが、ここでは礼法としての詳細かつ煩瑣な規定に基づいて束髪が行われており、その対極にあるのが被髪であることがわかれば十分であろう。

このように髪型は礼俗の規範であり、姿態のなかの規律ある表徴といえる。経書や礼書の記載との合致が知られる考古資料は寡聞にして知らないが、男子の束髪は画像資料に数多くみられ、絵画画像としてはよりも立体的に表現された周知の資料として秦始皇帝陵兵馬俑坑出土の人物俑があげられる。

その他では河北・満城一号漢墓の棺と槨の間から出土した出土した玉人は高さわずか五・四センチメートルであったが、髻几を前にして端座した姿勢で束髪して頭頂部に冠を載せ、袖が広く丈の長い右衽の衣服を着ている様子が表現されている。この資料の底部には「維古玉人王公延十九年」という陰刻の銘文があり、この遺物が玉人と呼ばれたことがわかる。満城一号漢墓の墓主は武帝の兄で、紀元前一・一三年に薨じた中山靖王劉勝と推定されており、



1 江蘇・丹徒北山頂84DBM

2 浙江・紹興漓渚鎮



3 河北・滿城1号漢墓



4 河南・信陽黃君猛夫婦墓（夫人）

図1 被髪（1，2）と束髪（3，4）に関する考古資料

玉人はこの当時の束髪を示している（図1―3）。³⁸⁾

女子の束髪に関しては春秋時代にさかのぼるが、墳墓の被葬者の髪そのものが残存した例があげられる。典型的な資料としては、河南・信陽黄君猛夫婦墓の女性被葬者の頭髮が極めて良好な状態で出土した。これは髪を結い上げて束ね、二本の木製筭を用いて留められている（図1―4）。墓の年代は春秋時代の初め頃とされ、女性被葬者は黄国（の国）の妻の猛姫と推定されている。³⁹⁾

戦国時代中頃から末頃と推定される湖北・黄陵馬山一号楚墓では四〇から四五歳くらいの女性被葬者の頭髮が残存していた。髪の長さは約一五センチメートルほどであり、後頭部で一まとめにした後、長さ四〇センチメートルの仮髪を繋いだ後、二つに分けて丸髻状に結び、木製の簪で留めていた（図2―1）。⁴⁰⁾

漢代墳墓の被葬者の髪形が知られる例としては、湖南・長沙馬王堆一号墓があげられる。この墓は前漢初めの長沙国丞相で軹侯利蒼の墓である二号墓に隣接し、妻である辛追が葬られており、被葬者の身体の遺存状態が良好なことで知られる。被葬者の頭部は頭髮が少なくなっており、下半部は仮髪であったが、髪全体を上方に結い上げ、龍甲・竹・角の三種類の材質の異なる筭で留められていた（図2―2）。この例によって漢代の上位階層の女性の束髪の実態が知られた。⁴¹⁾

三国時代より時期的に遅れる例としては、固原北魏漆棺画（寧夏回族自治区固原市）として知られる彩色画像のある木棺の出土した磚室墓から墓主夫婦の骨片と二人分の髪が出土した事例がある。髪は男女ともに筭で留められており、北魏代の束髪がわかる稀少な資料となっている（図2―3）。この墓の年代は漆画の画像の様式や出土したペルシャ銀貨・青銅器などから北魏の太和一〇年（四八六）頃と推定されている。⁴²⁾

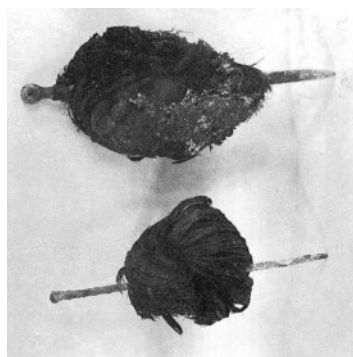
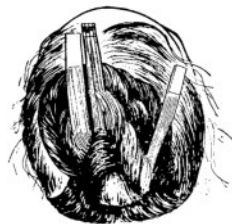
三国時代の細部がわかる実物の髪については算聞にしてその例を知らないが、ここであげた先秦時代から漢代の髪の実物資料によって、実際の束髪の一端を知ることができる。



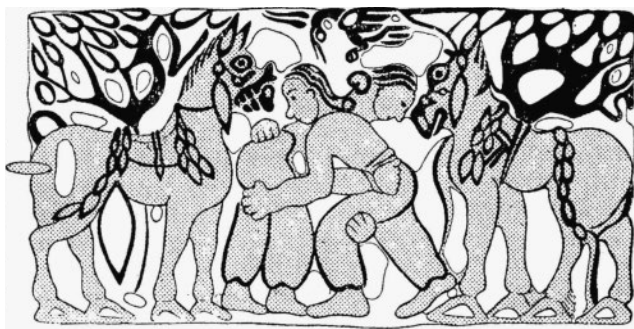
1 湖北・黄陵馬山1号



2 湖南・長沙馬王堆1号墓



3 寧夏・固原北魏漆棺画



4 陝西・客省莊 K140号墓

0 1 2 3厘米

図2 束髪（1～3）と被髪（4）に関する考古資料
〔5～7はスケールアウト〕

すでにふれたように被髪は東夷のみでなく西戎にも行われたとあるように中華の礼俗を脱した風俗であるから、中華社会での束髪以外の髪型も含まれるとともに周辺民族にも存在する。そのなかで、たとえば北方民族の髪型が知られる考古資料があり、つとに知られるは陝西・西安客省莊出土の青銅製飾金具である。これは客省莊K一四〇号墓と編番された土壙竖穴墓から出土したもので、透かし文様として、両端に樹木を配し、その内側に向かい合う二頭の馬があり、馬と馬の間には組み合つて格闘する二人の人物が表されている。人物の顔は鼻が高く、頭髪は長髪で束ねられておらず、房状にして後頭部に垂らしている様子が表されている(図2-4)。この墓は戦国時代末から前漢の武帝代以前の築造時期が推定されている⁽⁴³⁾。

このような中華世界の束髪の対極にあり、北方民族の長髪とも異なるのが、結い上げることも留めることもない「被髪」であり、あるいは根本的に髪そのものを剪つた状態の断髪であり、これらを対照して具体的に理解するために関連する考古資料を提示した。

五 魏志倭人伝の被髪と徒跣の意味

ここまで中国古代における被髪と徒跣に関する文献記載と関連する考古資料について整理してきたが、これらを踏まえて魏志倭人伝における二つの語のもつ意味を考察してみたい。

まず、被髪の意味については文献の用例からの考察があることはすでに論じたとおりであり、端的には『爾雅』に「狒々は人に似ているが、被髪して迅く走り、人を食らう」とみえることに象徴されるように礼をそなえた人ではなく、異常な状態を示すことを示す語として被髪が用いられている。被髪は礼俗を超えた異民族や人や鬼などのいわば異常な状態を示す場合に用いられた語であることが確認された。倭人の習俗として、被髪の語が用いられていることは、『三国志』編纂時点での中華社会からは倭人が礼俗の規範にとどまらない集団と認知されていたこと

を端的に示している。

これらをふまえて、あらためて魏志倭人伝の文章を検討してみると、「断髪文身」の「断髪」と女子の「被髪」とは前後の文章で現れ、明らかに区別して用いられていることがわかる。すなわち、「断髪」は水没する習俗の一環としてみえており、すでに多くの指摘があるように、このような用法は呉越や交趾などの中華からみた東南地方の風俗と同じ類型であり、倭がこれらの地方に近いという『三国志』編者を含むその時点での地理的観念を示していると考えられる。「文身」「水没」などの習俗も、同様の人文地理的認識に基づいた記述であり、倭人伝の記載を検討する前提条件として、これらが事実であるかどうかの検討とは異なる次元で把握する必要がある。

すでにふれたように被髪も中華世界の外に住み、儒教的な礼俗から懸隔したことを示す定型的な語であり、『三国志』の倭人に対する観念を示している。その対極としての孝の基本として、あるいは礼俗の場での髪については、すでにふれたように『孝経』『礼記』を主体とした経書・礼書にみえている。これに対して、倭人の被髪も婦人を対象とはしているにしろ、束髪したうえで冠などを被る中華の礼俗とは異なる世界であることを端的に示す定型語であり、実態としてよりも、むしろ『三国志』の立脚する観念として考えるべきである。「被髪」の語は東夷以外にも西戎にも用いられていることから、礼俗のおよばないことを一義的に示し、束髪を規範とすると、この語が髪そのものを切る断髪より相対的には上位の概念であることを意味する。すなわち、被髪文化をもつ社会において生活の次元や生業の場において断髪が行われているのである。

魏志倭人伝の記載にこれを適用するならば、「被髪」は女子の姿態として記されており、「断髪」はこれとは明らかに区別されるから、倭人のなかでも「水没」して「魚鰭を捕らえる」ことを生業とする人々に限定し、なおかつ男性の習俗として記されていると考えられる。倭人の女性習俗である「被髪」とともに男子は「露紒」であり、「以木綿招頭」と記されており、露紒は結んだ髪を露わにし、頭には木綿を巻き付けていたなどと解されている。

露紒も『三国志』では魏志倭人伝のほかには韓伝に「魁頭露紒」とあり、これを引いた後の正史にもみえており、また、『晋書』馬韓伝では「科頭露紒」とあり、同様の意味で用いられている。露紒の用例は正史のなかでもこれらに限られ、魏志倭人伝では木綿を巻き付けるとされているとしても、やはり中華社会において束髪し冠をつける礼俗とは異なるものとして記されていることが、より明らかになる。

いっぽう、徒跣に関して文献・史料に現れる用法と意味を類別的に整理し、緊急の際の非常を示す行動、謝罪を体現する場合の動作、夷狄の習俗、喪例に際する行為という四つがあることを示した。さらに夷狄を除くと、共通するのは儒教的礼俗を強調したり、そのあまりこれを逸脱したところに発生する行為たることに起因する動作や行為であることを論じた。

このような徒跣の用法のなかでも、とくに衣を脱いで肩や体を露わにする肉袒や冠を脱ぐ免冠などの語とともに謝罪を体現する場合に関して、中国古代の文献を博搜した研究によると、①降伏②謝罪③反乱④蜂起⑤喪礼⑥祭祀などの際に行われたことが明らかにされている。それらに通底する意味として、本来は衣服が社会的な属性や権威を表示するものであることから、世俗的な肩脱ぎなどによって肌を露わにすることは世俗的秩序あるいは権威を体現する衣服を脱ぎ去り、一個の赤身の人間として自己の全存在性を完全に露呈し、魂の有様をすべて相手にみせることであるとされている。⁽⁴⁵⁾すなわち、肉袒・右袒は社会属性の剝奪または離脱を可視的に表すことに他ならない。肉袒・免冠とともに行われることによって、謝罪を示す徒跣も同様の意味をもつと考えられ、これらの動作をあわせて行うことによって謝罪の姿勢が強調されることになる。すなわち、徒跣も肉袒と同様に社会的権威や世俗的秩序からの離脱を示すのであって、それはいいかえると、徒跣や肉袒の姿態は中国古代の価値観の規範となっていた礼俗の外にあることを体現しているのである。

これらを参照して、徒跣と被髪に対する魏志倭人伝の編纂時点での認識や現実的意味について考えてみたい。被

髪を含む髪の同時代的意義に関して注目されるのが編纂者である陳寿の父の記述である。『晋書』陳寿伝（以下、陳寿伝と略称）によると、馬謖の作戦の不備によって蜀が街亭の戦い敗れた時に馬謖が斬罪されるに際し、馬謖の参軍であった陳寿の父も、これに連座して被髡の恥辱を蒙ったのである⁽⁴⁶⁾。陳寿伝には基本的な年次などの基本的な事実関係の錯誤や内容の意図的な改変などがあり、内藤湖南が論じて以来、詳細な史料批判が行われており、史料性に問題があることが縷々、論じられている⁽⁴⁸⁾。ただし、馬謖の参軍であったとする陳寿の父に関しても、蜀漢における軍府の官属研究からは諸葛亮の丞相宮の参軍の存在が確認されており、おそらく街亭の戦いの時点で馬謖の指揮下に属していたものとみられることとあわせて、被髡そのものについて虚構とまでは考えられていない⁽⁵⁰⁾。この記述の真偽に関わらず、三国時代には被髡が現実性をともなうて認識されていたことが重要である。

ここでいう被髡すなわち髡刑は髪を切られる刑罰であり、これに対する刑としての位置づけや認識は、『後漢書』長仲統伝にみえる言説が参考になる。すなわち、長仲統は肉刑の廃止について、死刑の下での刑罰は髡鉗（頭髮を剃り鉄の首枷をはめる）であり、その下の刑は鞭笞（鞭打ち）であるとし、死んだ者は生き返らず、髡に処された者は傷つくこともなく、窃盗や密通、宴席での賄賂や過失による障害などの死刑に相当する罪でないものは、髡刑すれば軽いとし、その中間の刑の制定を説いている⁽⁵¹⁾。『後漢書』は五世紀の編集ではあるが、髡刑の相対的な軽重に対する考えが推し量られる記述である。

髡刑を表した図像として、山東・諸城涼台の孫琮墓画像石には跪き、鞭打たれる罪人とおぼしき人物たちが刑吏に今まさに髪を切られる場面があり、その実態が知られる（図3）⁽⁵²⁾。この墓の題記には墓主が「漢陽大（筆者注・太）守」であった「孫琮」であったことが記されており、史料等にはみえないが、関連する文献や碑文の検討から後漢代でも一世紀頃に存命した人物とみられているから、これによって陳寿の父の髡刑を現実的に理解できる。巷間に知られる泣いて馬謖を斬るあるいは涙を揮って馬謖を斬るとして著聞する故事による成語の背景に陳寿の父の



図3 山東・諸城涼台・孫琮墓画像石の髡刑（上）
と処刑場面（下・中央上部の拡大）

悲運があつたならば、魏志倭人伝の編纂された時代には髪を切ることが刑として実際に行われたのみならず、子たる陳寿が父の髡刑に直面したという現実の状況が存在した。このことは魏志倭人伝を含む『三国志』の被髪が同時代的な髪政治性および社会性の具現化であることを端的に示しており、現実の次元での認識を伴う語であつたことを示している。

ひるがえつて鑑みるに陳寿伝には陳寿その人の出自は「巴西安漢人也」とされており、これは現在の四川省南充市に該当するとされ、大局的には秦漢代以来の異民族として認識された西南夷との隣接地帯に含まれる⁵⁴⁾。また、西南夷のほかにも、後漢代の永初三年(一一二)には先零羌の益州への侵入があり、巴蜀の人々は実際に異民族に接している。

このような陳寿自身の境遇と体験、出身地域の史的環境から被髪の実態を知悉し、礼俗の規範とは異なる習俗として実際のな認識を有していたはずである。すでにふれたように「徒跣」についても『三国志』編纂時には実際の習俗として生きており、「被髪」はまさに陳寿が直面したのであるからこれらの語を用いて表現された倭人の姿態は、遙かに遠い異民たちに対するたんなる非現実的な思惟ではなく、体験を基にした礼俗に対する認識に依拠しているのである。すなわち徒跣・被髪は三国時代に生きる人士の認識に基づいた語であり、文献記載にみた夷狄に対する類型的な用法と考古資料の図像表現でみたように、この語をもって単純に倭人の姿態の個別具体的な特定の材料とするのは適當を欠くのであり、これらの語は『三国志』編纂に伴う同時代的な意味と認識を表しており、それは魏志倭人伝研究の一義的な指標であることを示している。

結語

論を閉じるにあたって、論述の展開にそつて内容を摘要し、結語としたい。

まず、魏志倭人伝にみえる被髪と徒跣に関する先行研究を整理し、おおむね「被髪屈紒」は「束髪のため」と解されることが多いことを示した。また、経書や史書などにみえる徒跣は葬儀に際する儀礼としてみえ、あるいは罪を責められる者が被り物を脱ぎ、「はだし」になる行為などとして理解されてきた。また、他には異民族の習俗としての意味も指摘されていることを示した。このような文献・史料に現れる徒跣の用法と意味については、緊急の際の非常を示す行動、謝罪を体现する場合の動作、夷狄の習俗、喪例に際する行為という四つがあることが知られた。そして、いずれにも共通するのは儒教的礼俗からは逸脱したところに発生する行為たることに起因する動作や行為であることを確認した。また、経書にみえる被髪としては東夷とともに西戎の風俗として記される。このように礼をそなえた人ではなく、礼俗の規範を超えたり、逸脱した異民族や人や鬼などのいわば異常な状態を示す場合に用いられた語であることを確認した。

いっぽう儒教的礼俗を背景とした風俗である髪型は経書等にみえる束髪があり、これを示す考古資料として遺骸に残された髪や図像などの人物表現など春秋・戦国時代から北朝にいたる例をあげた。また、束髪に對置される考古資料として断髪や被髪についても図像表現をあげた。すなわち、束髪の対極にあり、北方民族の長髪とも異なるのが、結い上げることも留めることもない「被髪」であり、あるいは根本的に髪そのものを剪った状態の断髪であり、これらを対照して具体的に理解するために関連する考古資料を瞥見した。

このように被髪や徒跣が儒教的風俗の埒外にあるという同時代的認識は『三国志』編纂の背景として、父が髡刑にあったという自身の境遇および異民族である羌と接する地域の出身であるという自身の体験および出身地域の史的環境からしても陳寿は被髪の実態を知悉し、それを礼俗の規範を超えた習俗として実地的な認識を有していたと考えられる。すでにふれたように徒跣についても、これまでは南朝・梁『職貢図』が参照されてきたが、『三国志』編纂時には実際の習俗として生きており、被髪はまさに陳寿が直面したのであるからこれを用いて表現された倭人

の姿態は、遙かに遠い異民たちに対するたんなる非現実的な思维ではなく、体験を基にした礼俗に対する認識に依拠していると考えられる。すなわち、徒跣・被髪は三国時代に生きる人士の認識に基づいた語であり、文献記載にみた夷狄に対する類型的な用法と考古資料の図像表現に現れるように、これらの語のみを単純に解釈して姿態の個別具体的な特定の材料とするのは適當を欠くのであり、これらの語が編纂に伴う同時代的な意味と認識を示しており、それは徒跣・被髪 of 解釈のみならず、魏志倭人伝研究の基本であるとともに指標であることもあわせて論じた。

註

- (1) 近年の研究としては下記参照。
津田資久「史料としての『三国志』」(『歴史評論』七六九、二〇一四年)
津田資久『魏志』の帝室衰亡叙述に見える陳寿の政治意識(『東洋学報』八四一四、二〇〇三年)
田中靖彦「陳寿の処世と『三国志』」(『駒沢史学』七六、二〇一一年)
(2) 三品彰英編著『邪馬台国研究総覧』(創元社、一九七〇年)九七〜九八頁
(3) 佐伯有清「魏志倭人伝を読む」上(吉川弘文館、二〇〇〇年)一二四〜一二五頁
(4) 王勇「弥生時代の倭人風俗に関する一考察―「断髪」と「被髪」の意味をめぐって―」(『四天王寺国際仏教大學紀要』三九、二〇〇四年)
(5) 菅政友「漢籍倭人考」『菅政友全集』(国書刊行会、一九〇七年)
(6) 三品彰英編著『邪馬台国研究総覧』(創元社、一九七〇年)九八頁
(7) 佐伯有清「魏志倭人伝を読む」上(吉川弘文館、二〇〇〇年)一二八頁
(8) 石原道博「訳注中国正史日本伝」(国書刊行会、一九七五年)
(9) 佐伯有清「魏志倭人伝を読む」上(吉川弘文館、二〇〇〇年)一四〇頁
(10) 賈才華「也論『被髪文身』」(『南京師範大學文學院學報』二〇〇六年第一期)(『中国語文獻』)
(11) 汪少華「『被髪文身』正義」(『古漢語研究』二〇〇二年第二期)(『中国語文獻』)
汪少華「再論『被髪』」(『語音研究』二〇〇八年第四期)(『中国語文獻』)
(12) 江紹原「髮鬚爪―关于它們的迷信」(開明書店、一九二八年)(二〇〇七年に中華書局より簡体字版として刊行)
(13) 高木智見「古代人と髪」『先秦の社会と思想』(創文社、二〇〇一年)

(14) 『礼記』王制

中国戎夷、五方之民、皆有其性也、不可推移。東方曰夷、被髮文身、有不火食者矣。南方曰蠻、雕題交趾、有不火食者矣。西方曰戎、被髮衣皮、有不粒食者矣。

(15) 『春秋左氏伝』僖公

(二二年) 初、平王之東遷也、辛有適伊川、見被髮而祭於野者、曰不及百年、此其戎乎。其礼先亡矣。秋・秦・晋遷陸渾之戎于伊川。

(16) 『後漢書』西羌伝／滇良

羌胡被髮左衽、而與漢人雜處、習俗既異、言語不通。

(17) 『史記』卷八四・屈原賈生列伝第二四・屈原

屈原至於江濱、被髮行吟沢畔。顔色憔悴、形容枯槁

(18) 『春秋左氏伝』成公一〇年五月

晋侯夢大厲、被髮及地、搏膺而踊曰、殺余孫不義、余得請於帝矣。壞大門及寢門而入、公懼、入于室、又壞戶、公覺。

(19) 『春秋左氏伝』哀公一七年七月

衛侯夢于北宮、見人登昆吾之觀、被髮北面而譟曰、登此昆吾之虛、綿綿生之瓜、余為渾良夫、叫天無辜、：

(20) 『史記』卷三八・宋微子世家第八

紂為淫佚、箕子諫、不聽。人或曰可以去矣。箕子曰為人臣諫不聽而去、是彰君之惡而自說於民、吾不忍為也。乃被髮詳狂而為奴。

(21) 高木智見「古代人と髪」『先秦の社会と思想』(前掲注13)

(22) 『三国志』卷第七・魏書七・吕布臧洪伝第七・臧洪

太祖困張超于雍丘、超言唯恃臧洪、當來救吾。衆人以為

袁、曹方睦、而洪為紹所表用、必不敗好招禍、遠來赴此。超曰子源、天下義士、終不肯本者、但恐見禁制、不相及逮耳。洪聞之、果徒跣号泣、並勒所領兵、又從紹請兵馬、求欲救超、而紹終不聽許。

(23) 『三国志』卷五五・呉書一〇・程黃韓蔣周陳董甘凌徐

潘丁伝第一〇・甘寧

寧廚下兒曾有過、走投呂蒙。蒙恐寧殺之、故不即還。：(中略)：寧許蒙不殺。斯須還船、縛置桑樹、自挽弓射殺之。：(中略)：蒙大怒、擊鼓会兵、欲就船攻寧。：(中略)：蒙母徒跣出諫蒙曰、至尊待汝如骨肉、属汝以大事、何有以私怒而欲攻殺甘寧。寧死之日、縱至尊不問、汝是為臣下非法。蒙素至孝、聞母言、即豁然意积(後略)：

(24) 『漢書』卷三九・蕭何曹參伝第九・蕭何

是日、使使持節赦出何。何年老、素恭謹、徒跣入謝。

(25) 『史記』卷九六・張丞相列伝第三六／申屠嘉

是時丞相入朝、而通居上傍、有怠慢之礼。：(中略)：嘉為檄召鄧通詣丞相府、不来、且斬通。通恐、入言文帝。文帝曰汝第往、吾今使人召若。通至丞相府、免冠・徒跣、頓首謝。

(26) 『漢書』卷八一・匡張孔馬伝第五一・匡衡

久之、衡子昌為越騎校尉、醉殺人、繫詔獄。越騎官属與昌弟且謀篡昌。事發覺、衡免冠徒跣待罪、天子使謁者詔衡冠履。

(27) 『漢書』卷六五・東方朔伝第三五

衡冠履。

去簪珥、徒跣頓首謝曰妾無狀、負陛下、身當伏誅。陛下不致之法、頓首死罪。有詔謝。

(28) 『三國志』卷五三・吳書八・張嚴程闕薛伝第八／薛綜

漢武帝誅呂嘉、開九郡、設交趾刺史以鎮監之。山川長遠、習俗不齊、言語同異、重訳乃通、民如禽獸、長幼無別、椎結徒跣、貫頭左衽、…(後略)。

(29) 『礼記』喪大記

凡主人之出也、徒跣扱衽拊心、降自西階。

『礼記』の喪葬に関する徒跣については下記文献を参照した。

谷田孝之『中国古代喪服の基礎的研究』(風間書房、一九七〇年)三五六～三六〇頁

(30) 『礼記』問喪

親始死、雞斯徒跣、扱上衽、交手哭。

(31) 『新唐書』卷二〇五・列伝第一三〇・列女／劉寂妻夏侯碎金

劉寂妻夏侯、滑州胙城人、字碎金。父長雲為塩城丞、喪明。時劉已生二女矣、求與劉絶、婦侍父疾。又事後母以孝称。五年父亡、毀不勝喪、被髮徒跣、身負土作冢、廬其左、寒不縣、日一食者三年。

(32) 江蘇丹徒考古隊「江蘇丹徒北山頂春秋墓發掘報告」

(『東南文化』一九八八年第三・四期)(中国語文献)

(33) 蔡曉黎「浙江紹興發現春秋時代鳩杖」(『東南文化』一九九〇年第四期)(中国語文献)

李修松「紹興漓渚出土青銅鳩杖源流考」(『安徽史学』二〇〇一年第二期)(中国語文献)

(34) 『礼記』内則

子事父母、鶏初鳴、咸盥漱、櫛縱笄綰、拂髦冠綵纓…(後略)

(35) 『礼記』曲礼上

男子二十、冠而字。…(中略)…女子許嫁、笄而字。『礼記』冠義

凡人之所以為人者、礼義也。…(中略)…故曰冠者、礼之始也。是故古者聖王重冠。

(36) 『史記』卷一二・儒林列伝第六一

冠雖敝、必加於首、履雖新、必關於足。

(37) 『韓非子』外儲說左下

夫冠雖賤、頭必戴之。履雖貴、足必履之。

(38) 中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理所編『滿城漢墓發掘報告』(文物出版社、一九八〇年)(中国語文献)

(39) 河南信陽地区文物管理委员会・光山県文物管理委员会「春秋早期黄君猛夫婦墓發掘報告」(『考古』一九八四年第四期)(中国語文献)

(40) 湖北省荊州地区博物館編『江陵馬山一号楚墓』(文物出版社、一九八五年)

(41) 湖南省博物館・中国科学院考古研究所、文物編集委員会編『長沙馬王堆一号漢墓』(文物出版社、一九七三年)

(42) 寧夏固原博物館編『固原北魏墓漆棺画』(寧夏人民出版社、一九八八年)(中国語文献)

(43) 中国社会科学院考古研究所編『禮西發掘報告…一九五五—一九五七年陝西長安原禮西鄉考古發掘資料』(文物

- 出版社、一九六三年)〔中国語文獻〕この資料と酷似する青銅製飾板はドイツ・ベルリン東洋美術館所蔵資料にも知られる。東京国立博物館編『大草原の騎馬民族―中国北方の青銅器―(東京国立博物館、一九九七年)一二七頁図版二一四などを参照。解説は一八三―一八四頁
- (44) 三品彰英編著『邪馬台国研究総覧』(前掲注2)
佐伯有清『研究史邪馬台国』(吉川弘文館、一九七一年)
佐伯有清『研究史戦後の邪馬台国』(吉川弘文館、一九七一年)などを参照。
- (45) 高木智見『古代中国における肩脱ぎの習俗について』(『東方学』七七、一九八九年)
(46) 『晋書』卷八二・列伝第五二／陳寿
寿父為馬謖參軍、謖為諸葛亮所誅、寿父亦坐被髡、諸葛瞻又輕寿。寿為亮立。
- (47) 内藤湖南『支那史学史』『内藤湖南全集』第一一卷(筑摩書房、一九六九年)二二一―二二二頁〔初出は一九四九年〕
- (48) 李純蛟『陳寿行年鈎沈』(『史学史研究』一九八九年第三期)〔中国語文獻〕
曹書傑『陳寿入晋仕歷考年』(『社会科学探索』一九九五年第六期)〔中国語文獻〕
津田資久『陳寿伝の研究』(『北大史学』四一、二〇〇一年)
- (49) 石井仁『諸葛亮・北伐軍団の組織と編成について―蜀漢における軍府の發展形態―』(『東洋史論集』〔東北大学〕四、一九九〇年)
- (50) 下記論考では父の髡刑とその恥辱の事実を基にして、これを行った諸葛亮を含めた蜀の記述に対する恣意性について論じた唐・劉知己『史通』曲筆卷七について、陳寿の評価は公平であったと論じている。
馬興波・張燕『陳寿『三国志』成書過程中幾個問題探討』(『文教史料』二〇〇八年第一五期)〔中国語文獻〕
- (51) 『後漢書』王充王符仲長統列傳第三九・仲長統／損益篇
肉刑之廢、輕重無品、下死則得髡鉗、下髡鉗則得鞭笞。死者不可復生、而髡者無傷於人。髡笞不足以懲中罪、安得不至於死哉。夫鷄狗之攘竊、男女之淫奔、酒醴之賂遺、謬誤之傷害、皆非值於死者也。殺之則甚重、髡之則甚輕。不制中刑以称其罪、則法令安得不參差、殺生安得不過謬乎。
- なお、この記事については下記論考を参照。
渡部東一郎『仲長治の徳刑観について』(『文化』七八―三・四、二〇一五年)
- (52) 任日新『山東諸城漢墓画像石』(『文物』一九八一年第一〇期)〔中国語文獻〕
- (53) 任日新『山東諸城漢墓画像石』(前掲注52)
黄展岳『記涼台東漢画像石上の『髡笞図』』(『文物』一九八一年第一〇期)〔中国語文獻〕
王恩田『諸城涼台孫琮画像石墓考』(『文物』一九八五年第三期)〔中国語文獻〕
- なお、この髡刑図の意味については、受刑者が捕虜や奴隸とする説を整理するとともに、墓主にとって負の印

象を与えないという観点から、漢陽太守・孫琮の執り行った減刑を表現したとする説も出されている。角谷常子「山東涼台「刑罰図」について」（『堺女子短期大学紀要』三一、一九九六年）

(54) 陳寿の出自や経歴、政治・社会的位置については下記を参照。

津田資久「陳寿伝の研究」（前掲注1）

藤井重雄「陳寿伝について」（『新潟大学教育学部紀要』人文・社会科学編一八、一九七六年）

上田早苗「巴蜀の豪族と国家権力―陳寿とその祖先たちを中心に」（『東洋史研究』二五―四、一九六七年）

(55) 秦漢代の西南夷については下記論文を参照した。

大澤勝茂「秦・漢より三国に至る西南夷の世界―漢人豪族社会の発展と少数民族支配」（『アジア文化研究』八、二〇〇一年）（中国語文献）

羅二虎「秦漢時代における中国西南地域の民族」（『東南アジア研究』三五―三、一九九七年）